松村通信第７８号

2012 年 9 月 15 日
松村勝弘

雑　感

近況・研究科長を終えて　まずは近況から話したいと思います。この 3 月まで大学院経営管理研究科長を務めていて、大変忙しかったのですが、4 月からそれを外れ、ようやく自分の時間が取れるようになりました。実のところ立命館大学では 65 歳定年なので、2010 年 3 月末でいったん退職し、普通なら特別任用教授、いわゆる特任教授として、持ちコマも少し減らして教育研究に専念するのですが、私の場合退職 1 年前に研究科長に任ぜられていましたので、この任期 3 年は研究科長をつづけました。それで、特任ではなく「特命」教授という、役職もできる特任教授のような立場をつづけていました。それが終わって、ようやく「普通の」特任教授として、通常なら 70 歳まで務めることになります。ま、ややこしい限りです。

この研究科長の 3 年間は、当然教授会を主宰するほか、執行部会議などの研究科内の会議の他、全学の会議、全学の委員としての会議など、何やかやありました。私の場合それだけでは済みませんでした。実は研究科長任期と同じ 3 年間、公認会計士試験の経営学の試験委員も務めていました。これは出題を含めて試験委員会が毎月東京で行われ、9 月中旬から 10 月中旬にかけての 1 カ月あまりの期間をかけての採点にも時間をとられます。これを大学での研究科長という役職と兼務していたので、忙しかったわけです。

科学研究費補助金に関連して　おまけに、2010 年、2011 年の 2 年間は文部科学省科学研究費補助金の審査委員にも任ぜられていました。これがまた大変で、この 2 年は、12 月中旬頃にどさっと審査書類が届けられ、これを 1 月中旬までに審査を終える必要があるわけです。5 段階評価でそれぞれ最上位 5 %、上位 20 %、中位 50 %、下位 20 %、最下位 5 %とか、配分比が決まっていますから、結構真剣に申請書類を読まないといけないわけです。ですから、この 2 年間は正月休み返上で審査にあたったわけです。だからここ 3 年ほどはやたら忙しかったわけです。ま、それまでである程度楽をさせていただいていましたから、最後のご奉公と思ってやりました。

こういう役職のさなかにも、いろんな事件・事柄も起こり、それも大変でした。詳細はここでは触れませんが、それはそれで人生勉強になりました。この同じ 3 年間にも若い人たちと一緒に科学研究費補助金を獲得して、「日本的経営と企業価値経営の融合に関する実証研究：ハイブリッド型日本的経営の探求」というテーマで共同研究を行いました。これは当然のことながら、収穫でした。この共同研究グループは今年 2012 年からの 3 年間にも科学研究費補助金を頂き、研究を続けています。この研究が愉快だったのは、たまたまメンバーが北海道札幌と九州熊本に勤務していたので、夏は北海道で、冬は九州で研究会を行い、しかもこの地は京都と違って、おいしい魚介類が豊富な地ですから、研究会を終えてからの夜のお楽しみが待ち遠しかったものです。この延長線上で今後も研究を続けていこうと思っていますし、またつづけてもいます。

哲学・宗教・人間　最近、やはり歳をとり、年輪が増えるにつれて、考え方も若いときほど単純でなくなったと思います。よく言えば重厚になったというのでしょう。というか、哲学、いや宗教、あるいは人間への関心が深まったと言うべきでしょう。それはまた、最近の風潮、新古典派経済学に基礎を置いた、市場万能論、新自由主義がわれわれ経営学に少なからぬ影響を与えている、いやむしろ悪影響を与えていると思うからです。新自由主義的風潮は経済だけではなく、政治をも劣化させていると思っています。とはいえ、2009 年のリーマン・ショック以降それへの反省も見られるように思います。でもまだまだその影響、悪影響は大きいと思っています。その日本経済、日本企業への悪影響については、今、論文を書いているところです。また今秋出版される経営学部 50 周年記念論文集でも、この点に触れました。詳細はそちらを参照していただきたいと思います。ここでは、そのように考えるに至った私の最近の思考傾向について述べたいと思います。

新自由主義の一番の問題点として感じるのは、人間の傲慢さです。これは日本の戦後の「近代化論」にも通底していると思います。あるいはまた、戦後日本で広まったマルクス主義とも共通の問題を含んでいると思います。かつて森嶋通夫先生は、マルクス経済学

を近代経済学の一派として分類されました（森嶋通夫『思想としての近代経済学』岩波新書）。それはこれらが人間理解の点で共通しているからでもあると思います。これらには西欧近代の問題点をはらんでいるからだと思います。少し飛躍するかもしれませんが、政治的に言えば民主主義の限界です。

市場主義と民主主義　市場主義と民主主義は通底していると思います。かつて大蔵省証券局長が山一證券破綻を目の前にして、市場が決めたことだと言い放ったことを思い出します。それまで大蔵省主導で事態を把握していながら、最後は市場が決めたと言い放つ、無責任さ、市場主義、民主主義の無責任さです。民主主義の行き着く先にポピュリズムがあります。ある種その対極にあるものとして共和主義があげられます。ある種のエリートのノブレス・オブリージュを唱道するものです(参考文献としてここではさしあたり、佐伯啓思・松原隆一郎編著『共和主義ルネサンス』NTT 出版、をあげておきます)。かつての官僚にはこれがあったはずです。

儒教・論語　ある種のノブレス・オブリージュを唱道する哲学・宗教観に儒教があります。読めど尽きせぬ孔子『論語』の世界です。どの古典にも共通していることですが、『論語』にもいろんな読み方があるようです。例えば論語の里仁第４、15 に「夫子の道は忠恕のみ」とありますが、ある論者は「『忠』とは真心をつくすこと、『恕』が、……他人のことを思いやる気持ちです」（于丹著・孔健監訳『論語力』講談社、32-33 頁）と読み、また他の論者は、「君主には率直に考えを述べ、君主が立派に政治をすれば協力するが、そうでなければ協力しない、という態度である。これがすなわち『忠なのである。』……『恕』は『自分自身の感覚の教えることを正確に汲み取りうる精神状態』」で「自分のやって欲しくないことは、他人にするな」という心だという（安富歩『生きるための論語』中公新書、62-63 頁）。

周知のように、『論語』には君子の道が説かれており、君子の持つべき「徳」が述べられ、まさに徳治政治の必要性を説いています。ノブレス・オブリージュです。今の日本の、いや世界の政治にそれが見られない。そこに多くの人たちに論語が受け入れられる素地があります。「現代の日本社会が、企業といわず、政府といわず、大学といわず、民間組織といわず、ありとあらゆる組織において、耐え難いほどの閉塞感に苦しんでいるのはなぜか。それは制度の問題でも、仕組みの問題でも、法律の問題でも、慣習の問題でも、文化の問題でも、グローバリゼーションの問題でも、途上国の台頭の問題でも、少子高齢化の問題でも、何でもない、と私には思えるのである。それはひとえに我々の社会が君子を欠いており、経営者が小人によって占められているからであり、『和〔相互の違いを尊重する動的な調和－松村注〕』が失われて『同〔自らの心を閉ざし、学習回路を停止して、表面的に同一意見を装って群れている－松村注〕』と『盗〔信頼関係を裏切る－松村注〕』とに覆いつくされているからではないだろうか。」（安富歩『生きるための論語』ちくま新書、2012 年、253 頁）言い得て妙です。

儒教を基礎に生き方を説いた戦後日本人に安岡正篤がいます。ここでは詳述しませんが、『安岡正篤　「こころ」に書き写す言葉』（三笠書房）を紹介しておきます。また、先に引用しました安富歩『生きるための論語』も一読を薦めたい一書です。なお、この本の序に、橋下秀美氏が寄せられた、次の一文にも興味をひかれます。

仏教「『般若心経』の『一切皆空』は既に悟りを得て知られた結論に過ぎない。我々が渇望しているのは、世の中を見切る智慧を獲得することであり、問題は、我々が如何（いか）にして悟りに至ることが出来るか、である。見切って得られた結論『空』と、見切る能力『般若』との間には、天と地ほどの差が有る。」般若心経にもいろんな読み方があるようです。

紙幅に限りがあるので、これから先のことについては、出来れば次回、さらに述べてみたいと思っています。最近は仏教にもかなりの関心を寄せています。最初、般若心経に関心を持ったのですが、さらに親鸞に関心を持ち、このあたりのことについては、2010 年末から 2011 年にかけて『松村通信』特別号や第 75 号でいろいろ書きました。

その後、大乗仏教の根本である唯識などにも関心を持ち始めました。そうするとさらにさかのぼって勉強したくなり、インド哲学にまで関心が広がりました。でも、インド哲学は難しい。このあたりのことについても、さらにまとめてみたいと思っています。次回以後もお楽しみに、というところでしょうか。

ＨＰを見て下さい。又何でも意見を。
皆さんのご意見を歓迎します。HP（http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/）もご覧下さい。また，メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい（matumura@mba.ritsumei.ac.jp）。